

す。豚の骨も捨ててあります。結構
どうにかなるものです。

そんな時、牡丹江でおにぎりを作
って送り出した一人に出会いまし
た。「今、兵隊さんの洗濯をしてい
るのよ。あなたもどうですか」と誘
われて行ってみました。洗濯は洗濯
でも「命の洗濯」と分かって戸惑い、
お断りして、その日から残飯を頂く
約束をしてもらいました。

また、西本願寺で難民の手続き方
法を教えて頂き、わずかですがお金
も頂けることになりました。
まだ、主人は熱が高く脳症を起こ
し、前後不覚の中でうわごとばかり
の毎日です。自分がどこにいるかも
分かりません。子どもたちのことも
分かりません。不思議と私だけが分
かるのです。夫婦とは不思議なもの
です。

数え年二歳の三男も、どうにか息
をしています。

頂いたお金も、すぐなくなります。
わずかな資金の活用法として、食糧
難時代なので「代用食品でも」と考
えつきました。

早速、キビとあずき、水あめを買
って来ました。鍋は金物の火鉢で代
用。薪ストーブに拾ってきた薪で、
まず、あずきとキビを炊き、一晚か
けておはぎを作りました。砂糖は高
いので、塩あめにして、上に水あめ
を塗って、一個百円で売りました。
入れ物ありません。机の引き出し
に入れ、ゲートルを首からかけて前
で持ちます。これが、飛ぶように売
れました。
売ったお金で、材料を仕入れては
作り、毎日疲れも忘れ、ありがたい
ことでした。

そのうちに少しずつ温かくなり、
食中毒を起こされては困るし、と考
えながら売り歩いていた時、一軒の
きびだんご屋さんに出会いました。

岡山出身なので懐かしく「卸もし
て頂けませんか」とお願いし、早速、
翌日から仕入れて売ることになりま
した。片道一里（約四キロメートル）
以上の道を、仕入れに行き、売り切
れては引き返します。何度も、何度
も仕入れては売り歩きました。やは
り、一個百円でした。

当時、三十六歳の私は、いつの間
にか「代用食のおばさん」と呼ばれ、
待っていて下さる人もいたほどで
す。

主人の病状は、ますます悪化して
きました。「四斗樽（だる）が壊れ
てビジョビショだ」と言う主人の言
葉に、見ると床ずれで背骨が出るほ